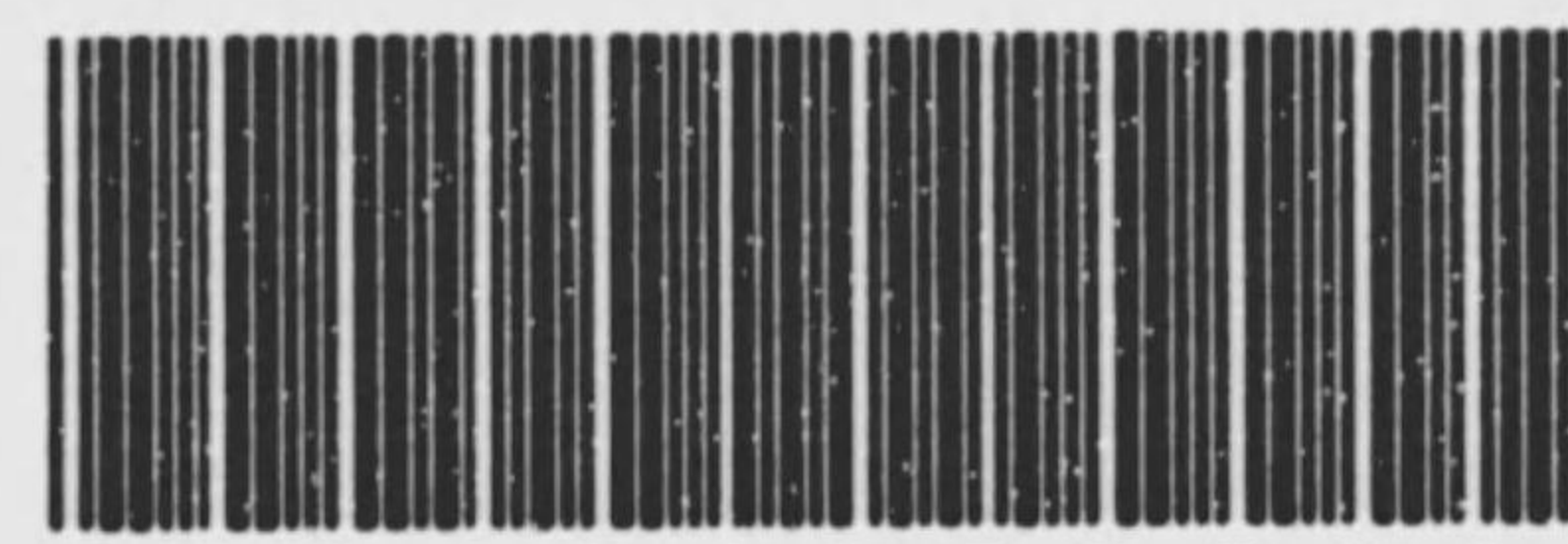


2



\*0010498000\*

0010498-000

特240-361

日ソ停戦協定とソ聯の陰謀

高木伍郎・著

春光社

昭和13

ABJ

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法第67条の規定に基づき、平成12年3月23付けで文化庁長官の裁定を受け使用するもので

特240

361

停戦協定と

ソ聯の陰謀

春光社





259

特 240

東亞事情研究會

361

尚木伍郎著

# 日ソ停戦協定と 聯の陰謀

春光社

十錢

38

28



特 240  
361

# 日ソ開戦の期刻々迫る

## 目次

- 一、日ソ遂に交戦す……………二
- 一、ソ聯の兵力集結四十萬……………四
- 一、日ソ開戦の期刻々迫る……………六
- 一、リ大將の脱走とその後の極東……………一
- 一、軍備に狂奔するソ聯……………三
- 一、ソ聯の極東軍備を抉る……………一六
- 一、ソ聯の強味と弱味……………一八
- 一、ソ聯侮るべからず……………二一
- 一、長期戦はこれからだ……………二二
- 一、日ソ戦は如何なる？……………二五
- 一、怖るべきソ聯の陰謀……………二九



# 日ソ停戦協定とソ聯の陰謀

高木伍郎 著

## 日ソ遂に交戦す

日ソ兵力が無氣味に對峙する滿ソ國境の一端、日本海に程近い滿領張鼓峰に突如、警備の手薄に乗じて數十名のソ聯兵はまたく不法にも越境し、その數、數十名より數百名に増加して、こゝを占據し、遂に鐵條網を廻らした。その後當然控へる塹壕の構築、山砲、速射砲、重機關銃の羅列、その上に不敵にも、ソ聯飛行機の示威的飛行、かう來ればもうこれだけで、戦のきつかけは待つばかりである。

果然、日ソ兩軍は遂に兵火を交へるに至つた。即ち我が軍は、ソ兵の挑戰に應じて、自衛上止むなく交戦するに至り、ソ兵を難なく撃退することを得たのであるが、ソ軍は、その後執拗にも、再

( 2 )

三逆襲し來り、重爆撃機は、爆撃さへ敢へてするの、戦意確實なるものがある。その後の戦況を、朝鮮軍報道班の發表によつて、當時の詳細を知ることゝしよう。

朝鮮軍報道班八月三日午前十一時半發表 三日午前十時までに達した情況は左の通りである。

(一)張鼓峰前面の敵は新たに増員したるものゝ如く二日午後三時ごろより歩兵三、四大隊砲十九門、戰車卅臺を以て洋館坪方面より逆襲し來り、彼我ともに距離約二百メートルに接近したるもわが猛烈なる銃砲火により撃退され約四百メートル後退、夕刻まで對峙せり(一)午後八時敵は再び執拗にも攻撃し來れるをもつてさらにこれを撃退相對峙せるまゝ今朝に至れり(二)ソ兵の損害は極めて甚大なるものゝ如し(一)わが第一線部隊將兵の意氣はますく旺盛にして陣地を確保しあり(二)敵の砲兵は古城東北約十キロ馬鞍山付近の陣地を占領し時々古城を砲撃せるもわが方に殆ど損害なし、同部落の住民は安全地帯に避難せしめつゝあり(三)敵の重爆撃機は去る一日低空飛行をなしたるためわが地上部隊の射撃を被り多大の損害を受けたるに懲り爾後は二千メートル以上の高度より爆弾を投下しあり、従つてその命中極めて不良にして、二日の如き十九機の敵重爆機が古城に爆弾を投下せるも、同地にあるわが兵舎の營庭に一個落し、また鮮人家屋を破壊せる外われに損害なし。

( 3 )



當時は斯うした情況に在り、我が方は隱忍自重してゐたのであるが、ソ聯兵は、それをいゝことにしてか、或は組し易しと観てとつたか、その後益々兵力を増大し、且つは重爆機、輕爆機が編隊を組んで越境し來り、爆彈の雨を降らし、機銃掃射を行ひ、戦車また盛んに出動して挑戦するなどの不法振りで、ソ軍は全く戦意に燃えてゐるのである。這次の事件が、單なる局地的事件として、外交交渉によつて、平和的解決が出来るかも知れないが、一度は平和に治まるとしても、たぎり立つた戦意を如何しよう。戦意はいつかは大爆發せずにはおかないであらう。ロンドンのデーリーエクスプレス紙ワルシヤ特電は、ソ聯政府は飛行士約百四十名、戦車三百臺、戦闘機二百臺をウラジオ方面に輸送したる形跡のあることを報じてゐる。

ソ聯は、飽くまで我と戦はんとしてゐるのだ。隱忍自重も、程度の問題である。不法に不法を重ねられたら、皇軍の面目にかけても、黙つてはをられぬ。それが東洋平和の爲めとならば、我も敢然と兵を進めるであらう。日支事變も、さうではなかつたか。従つていつ日ソが開戦するかは知り得ないところである。たゞ我等は、日ソ必戦と觀て、準備を進めるべきである。

( 4 )

### ソ聯の兵力集結四十萬

ソ聯兵が、不法にも越境し來り、日ソ兩軍が兵火を交へるに至つた、事件の發火點張鼓峰とはどんな處か？ 我が朝鮮の北端から一跨ぎだし、高さ百四十米の小山とはいへ、日滿ソ國境を伏蹙し、就中朝鮮の羅津要塞を一望におさめる、我國にとつては軍事上まことに重要な地點である。だからこそ枚擧にいとまない今迄のソ聯越境事件のうちでも由々しい重大事件である。

ソ聯は此處を占據して、軍事上の重要據點たらしめ、攻撃態勢を整へんとしてゐるのである。よくソ聯軍の配備の情勢を觀察するに、張鼓峰の後方に眼を轉ずれば、浦鹽は既に一大トーチカを形成し、狙撃兵團、海岸重砲兵、高射砲、戦車、飛行部隊、化學、機械化部隊が總動員されて總兵力十萬、『寄らば斬るぞ』と大見得を切つて、日滿側を頭から嚇しつけて居るのである。

また、浦鹽の北、シトコフには重爆撃機百數十機をつらねて、今にも日本海を渡り、東京を空爆の餌食にしようとする渡洋空軍根據地を設けて居るし、驅逐艦、潜水艦が多數待機して日本海を睨みつけて居る。ソ聯の兵力集中正に四十萬と言はれるのである。

日ソ間に、戦争の勃發危機が幾度か唱へられてゐる折も折、ソ聯は愈々乗り出したのであらうか？ さもなければ何故かゝる大軍を集結する必要があるか？ 赤化、侵略を以てソ聯建國以來の國是とする彼が、國境線不明だとか、國境警備だとかの、狡猾極まる名目を口にしての越境、派兵に

( 5 )



しては、あまりにも大がかりな行動ではあるまいか。

共産黨獨裁は、スターリン一個の専制政治にとつて代つたソ聯、しかもスターリンの約束した國民生活水準の向上などは思ひもよらず、欠乏と、忍苦を強ひて来て、これが國民の不滿と代り、黨内にも不平分子の續出から、これが大々的に爆發して、反對の烽火は、彼自身に向つたと知つたスターリンが、これを排除せんとして乗出した、暴虐あくなき國內肅正に、動搖した人心を巧に國內紛争から、國境に集中させて日ソ開戦の危機を、國の内外に高唱して、自國の失墜せる信用を、内外に取戻さんとするきつかけを作らうとしたのがソ聯の魂膽である。

それにしても、怖るべき魂膽、國內紛争の責任を轉化して、ソ聯兵の不法越境から、日ソ戦争にまで導かんとした彼の魂膽が、今まさに、彼の思ひ通り日ソの正面衝突にまで爆發せんとしてゐるのである。

また我々國民の注意が、日支事變にのみ注がれて居るすきに乘じて、豫てから垂涎待望の滿洲沃土を、一舉に獲得せんとする野望に外ならないに於てをや。

### 日ソ開戦の期刻々迫る

蜿蜒四千三百軒に亘る滿ソ國境に張りめぐらされたソ聯のトーチカ、高射砲、飛行隊、戰車群、水も洩らさぬ防禦構築は、それが直ちに攻撃に移る準備でもある。その間に點在する越境兵の監視小舎、兩國の自然の國境をつくる滿々と水をたゝえた黑龍江の流れ、さては楊柳の並木にかくれた銃眼、河面にはソ聯快走艇が疾驅し、偵察飛行の爆音、河岸の兵舎からは、入れ代りたち代り兵士の姿があらはれる。一度滿ソ國境に佇めば、ソ聯の神経は一齋に尖鋭となる。まこと緊迫の情勢にある。

楊柳は長閑に風にそよぎ、放たれた家畜は牧草を喰んでゐる平和な滿洲國側の風景に較べて、何と慌しい無氣味な對照ではないか。

明確を欠く滿ソ國境線を口實に、度重なるソ聯兵の不法越境は何を語るか？ しかも今夏の張鼓峰不法占據、陣地構築に至つては、明かに滿洲國領域であることの法的根據を破つた、意識的な越境であり、その惡質の度に於ては、從來の單なる越境事件とは著しく相違するものである。枚擧にいとまない過去の滿ソ兩國の衝突事件は、それが直ちに戦争の導火線たり得る危険を孕んで、日ソ開戦かの危機を叫ばしめたが、我國の斷乎たる強硬態度に事なきを得て居つた。

そもそも日本が、滿洲帝國建設の爲めに、尊い血を流して以來、傳統的侵略政策をもつた帝政口



シヤ時代からのソ聯の勢力は、滿洲から完全に驅逐されて、いまいまでも、恨をのんで滿洲から退いた。『日本怖るべし』、滿洲から退いた彼は、その後の我が大陸政策の確立につれて、かく感じ來つたのである。

日本の進出を阻止するには、先づ國境軍備の強化である。時恰も産業五ヶ年計畫の遂行途上であつた彼が、全力を注いで軍備の強化に狂奔し、極東國境に續々防禦陣地の構築をはじめ、老大な軍隊を駐屯しはじめた。日本の大陸進出と、赤化防衛の熾烈な行動は、彼をして益々我を畏怖せしめ、軍備の強化に拍車をかけるのであつた。

その後の日本はどうであらうか？ 日滿ブロックの強化と、日本の日増しの隆盛に對するに、彼の極東産業、軍備の充實はともに二大強國の著しい國力發展によつて、階級、利害を反する兩國の對立が、國境を接する滿蒙に於て日に尖鋭化したのであつた。

帝政ロシヤ時代からの外蒙侵略政策は、ソ聯になつても、依然強烈に引繼がれ、近年こゝが全く完全なソ聯の支配に屬し、こゝも滿洲國に接するトーチカを形成して居る。更に赤化の魔手は新疆に延び、既に綏遠、山西、陝西諸省に蟠居する支那共產軍は、今回の日支事變によつて多大の打撃を受けたとはいへ、ソ聯の東亞赤化の前衛となつて居ることは、彼の野望の現れを語るものであら

ねばならぬ。

世界を赤化するには、先づ東亞を擾亂して、その原動力たらんと志したソ聯の政策は、またこゝにも我日本の防共政策と、真正面の衝突を免れなかつた。

世界赤化の大禍根を除いて、眞の平和と、文化を確立しやうとする防共陣は日、獨、伊から滿洲國、スペインのフランコ政府、北支、中支政府にまで、しつかりと結びついて、なほ今後諸外國の參加が續々行はれやうとしてゐる事は、ソ聯にとつて全く、一大障壁でなくて何であらうか？ 日獨防共協定締結を機としてソ聯の我に對する態度は、著しく硬化した事實は否めない。

またそれ以來、事毎に日獨伊を敵視して、國民の眼を我々に轉じさせ、今にも防共諸國がソ聯を侵略せんとする如く宣傳これつとめたのである。いづれも、日獨兩國の軍備を誇張して國民に知らしめ、彼等の敵意をいやが上にも昂まらせて、愛國心の奮起を煽り、政府首腦者に於てすら、公然と日ソ、ソ獨開戦急迫を力説する有様である。いやしくも政府當局者が、かゝる言葉を弄するとは、まことに由々しい外交問題であらねばならぬ。

一昨年、故トハチエフスキ元帥は、東西兩方面に、同時に日獨の攻撃を受けても、夫々獨立作戰によつてこれ等を打破し得ると、自信たつぷりな演説を行つて、赤軍の一大示威を行つたことは



注目に價する問題である。

それはとにかく、滿洲國の建國以來、急テンポで増強されたソ聯極東軍だけでも、日滿事變以前の四倍乃至六倍に達して居ることは、如何に虎視眈々と我等の隙を窺つて居ることか、また我國にとつても、この背面を近代化された老大な軍備に圍まれて居ることが脅威でなくて何であらう。

我國運の日の隆盛と、東亞赤化防衛の重責を背負ふ立場を、憎惡を以て敵視した彼は、あらゆる壓迫を加へて自國在留の日本人を逐ひ出したり、法律上きめられた我が領事館を閉鎖し、また我が當然の企業である北洋漁業の進出を阻止したり、北樺太の石油、石炭利權を壓迫して事實上これ等の自然消滅を企てる如き、言語に絶する態度に出で、經濟的彼我の對立も日毎に尖鋭化して來たのである。

これ程強硬な態度を見せたのは、滿洲事變以後であるし、こゝに至るには何等かの強力な背景がなければならぬ筈である。ソ聯外交一流の駆引もあらうが、まかり間違つて、日ソ戦のどたん場に立至らないとも限らない危険な火遊びが出来るのも、ソ聯極東軍備の強化が、バックであるといふ彼の示威に外ならないのである。

その極東軍備の強大を楯に、度重なる不法越境して日滿側を威嚇するのも、四十萬の大軍を擁し

ての積極的挑戦であることを銘記せねばならない。

剩さへ戦車は出動し、重爆機が爆弾を投下するといふに至つては、現地にある我が將兵たらずとも、我が日本國民として輕視してゐることは出来ない。我が方の出方によつては、戦闘は既に擴大されつゝあつたかも知れない。無氣味な對峙は何時まで続くか。戦意は益々醸成されつゝあることは確かだ。日ソの開戦!! その時期は刻々に迫りつゝありと言はざるを得ない。

### リュシコフ大將の脱走とその後の極東

滿ソ國境緊張の折も折、六月十三日午前五時三十分、曉の朝霧を衝いて、突如一ソ聯將校が滿洲國領内琿春へ越境して來た。これこそ極東ゲ・ペ・ウの總取締ともいふべきソ聯政治大將、詳しくいへば、ソ聯國家保安部委員三等大將ゲ・エス・リュシコフに外ならぬ。ソ聯極東赤軍の相次ぐ越境事件や、國內大肅正工作の折柄、大センチションを卷起すのに十分であつた。

さきにルーマニヤ駐劄ソ聯公使ブテンコが肅正の危険身に近きを知つて、ファシストの國イタリヤへ逃亡して共產黨と絶縁したのを見て來た處へ、リュシコフ大將は、スターリンの保安隊、ゲ・ペ・ウの總元締であるに於て、全く世界の耳目を衝動せしめるニュース價値をもつものであつた。



勿論ソ聯當局は、リュシコフを全然假想の人物と宣傳したが、明かに、少なからざる狼狽ぶりを見せたのであつた。反對に事實を證據立てる裏面工作が次第に暴露し、また所もあらうに、ソ聯の憎みてもあまりある敵、日本に脱走したことは、モスクワの驚愕その極に達したのである。リュシコフ大將のその後の手記や、内外記者團の會見によつて、ソ聯の内紛が愈々裏付けられ、これ等が白日の下に曝されたことにも極度の狼狽振りが見られた。

彼が當然危険の迫る妻や兒を國內に置いてまで、國外へ脱走したことに、當然の理由がなければならぬ。これこそ戦慄すべきソ聯の恐怖政治の暴露である。

彼はまだ三十八歳の若さであり乍ら、數々の勳功によつてゲ・ベ・ウの長官、三等大將の地位にまで漕ぎつけた。スターリンの飽くなき血の肅正の裏に、陰謀摘發の使命を帯びて暗躍したその敏腕が、スターリンの信を得るに至つたが、豈計んや肅正の危険はこの時既に已にも迫つて居たのであつた。極東に在つた黨員や、指導者が次々とモスクワに召還、處刑されたのを見て、彼も亦すでにその危険を豫知し乍ら、己も同じ徹を踏んで空しく大死するか、飽く迄スターリンに闘争すべきかの岐路に立つて、敢然後者を選んだのである。

身を以て國內肅正の任にあつたリュシコフは、同志の公判廷に臨んで、これ等の陰謀事件が實在

したものでなく、故意に作られたものであることを證明して居るが、スターリンの悪鬼的手段に斃れた反對者の行爲が、悉く國家や國民の、眞の幸福から出發して居るに拘らず『國民の敵』の汚名を冠せられたことを、我身に較べて感慨深く語つてゐる。ともかく我々の、ソ聯國內肅正に對する判斷の正鵠は、リュシコフ脱走によつて完全に裏付けられたと言つてもよい。

彼が肅正の魔手を國外に避けたのを機會として、モスクワは、果然國防人民委員次長(陸軍次官)メフリスを極東に送つてリュシコフの後任となし、彼の辣腕によつて、更に一段と強化した肅正の手は極東赤軍に及び、先づリュシコフ脱走の當面の責任者として煙秋のゲ・ベ・ウ隊長イワノフ大佐、及びペリロフカ大佐は罷免されてモスクワに送還の途中、遂に行方不明となつた。赤軍は申すに及ばず極東ソ聯の人心は極度の不安に戰いて居る。

またリュシコフ大將脱走に續いて、壓制に耐えかねたソ聯將兵も、滿洲國に越境してその保護を懇願する者數知れず、あくまでスターリンの暴虐を物語るものがあらう。

## 軍備に狂奔するソ聯

一口に赤軍といつても、各國の軍隊と著しく相違するソ聯軍隊は、ポリシエヴァイキーが、自衛軍



隊をつくつた所謂赤衛軍から、今日の老大な赤軍に形づくられる迄には、いろ／＼の變遷を経て來た。言はゞ革命の成功から國內戦の苦闘時代を通じて五百餘萬と著しく膨脹した軍隊を整理したり、その後の改編で民兵軍制の確立やその他の根本的改革に遭つて今日の基礎が出来たのは、第一次五年計畫のはじまる頃、つまり一九二八年であつた。最近十年間でこれを基礎とした著しい赤軍の飛躍が見られたのである。この間のあらゆる政治經濟的困難を切り抜けて、世界一の老大な軍備を終へたのは、全く五ヶ年計畫のお蔭といつてもよい。つまり重工業——軍需工業の發展は、ソ聯の軍備に密接に結びついて、全く近代化された軍隊を形成し、量、質ともに強化された軍隊に飛躍したわけである。これは世界のひとしく驚異したところであつた。時あだかもソ聯の敵ナチスドイツが、東に滿洲國が誕生したことは、益々赤軍の強化に拍車をかけた。

赤の廣場で毎年行はれる赤軍觀兵式の一大示威運動は、ソ聯の言ふ「外敵侵入の際の備へ」ばかりではなく、建國の國是である世界赤化への積極的攻勢を物語るものでなくて何であらうか？ この點を特に注意しなければならぬ。世界赤化の爲の一大援軍を以て、自ら任じて居る赤軍こそ、世界各國と著しく相違するソ聯赤軍の特徴なのである。だからこの爲には、あらゆる困難を忍んで、第一に軍備、第二に軍備と、赤軍の強化に全力を注がなければならなかつた。

かくの如く、五ヶ年計畫は列強にとつても、實に容易ならぬ意義をもつて居る。重工業の確立即ち赤軍強化、人的、物的資源の總動員が即ちこの終局の目的であつたからである。例へばその以前は、ソ聯では自動車も飛行機も、化學兵器も出来なかつたのが、自國でつくられるやうになつたし、外國の技術をどし／＼自國に採用して量質ともに見違へる發展を遂げたことでも、これの重大任務が判るし、この間には絶えず國民に政治教育を徹底させて、國內整備の曉には、世界赤化の用意が整つたわけである。凡そ各國の軍備は、それが假想敵國の軍備を目標にほゞ對抗し得る程度に整へることは大體一致したところであらう。ソ聯の各國との表面妥協的態度は、その以前の尖鋭的な敵對を大分和けて、今では西にドイツ、東に日本を敵として鋭意軍備を進めて來て居る。その平時總兵力二百萬、飛行機、戰車各五千以上、別にゲ・ペ・ウ直屬軍隊二五萬以上といはれるソ聯では、民間軍事教育も頗る徹底して、大規模な大衆訓練に参加する會員數二千數百萬を算へ、これが戦時に於ける役割は甚だ重要なものである。

ソ聯陸軍の機械化、驚異的たる空軍は、その最も誇る赤軍の偉力である。空軍の實力は軍用機のみには止まらない。いざといへば、交通産業方面に活躍する民間飛行機が直ちに武装されて戦線にとび出すし、大衆の航空熱は頗る盛んなものであることを忘れてはならない。



## ソ聯の極東軍備を抉る

こゝでは最も必要なソ聯の極東軍備に移らう。飛行機、戦車各二千、軍隊二七萬、ゲ・ペ・ウ軍隊數萬、及びバイカル地方のものを合せて約四十萬ときいただけで雲霞の如き大軍、日本の常時兵力を遙かに凌駕するものである。これでは如何に世界にその精銳を誇る我が皇軍ありといへども、幾分心細い氣がしないでもない。

極東赤軍は、我が國の大陸政策を極度に猜疑して、滿ソ國境地帯の防備を年々強化し、隙あらば侵略の野望を遂げんと、積極的攻勢に出づる戦法が、四十萬の大軍をもつて居ること、産業五年計畫によつて、極東地方にも生れ出た軍需工業都市を背景として、數年は極東だけで獨立して日本と戦ふことが出来るといふことが特徴である。

この後の部分を判りよく言へば、五ヶ年計畫は、シベリヤに眠る資源を開發して、どしどし新しい都市や、軍需工場を建設し、これを軍事的に見て、重要な地方と結びつけ、軍隊や軍需品をヨーロッパから仰ぐまでもなく、自給自足で、日本と戦ふことが出来るといふのである。軍隊は歐露からの在郷軍人を屯田させ、色々の特點を與へて、家族と一緒に移住させ、いざといへば、す

ぐ戦線に徴集出来るといふのも注目すべき點である。

これだけの用意あればこそ、ソ聯政府首腦者が、日本とドイツに對して、あれ程の示威演説を行ふことが出来るのだと背ける節もあるが、滿洲事變以後、滿ソ國境にソ聯獨特、世界ではじめてのトーチカといふ堅固な防禦を施し、戦車、飛行機の攻撃的武器をならべた。浦鹽は勿論極東海軍の根據地、奇襲作戦にそなへて潜水艦を多數待機させてある。この他に東京空爆のために、二百機の重爆撃機が出勤出来ることも銘記すべきことである。

浦鹽、ハバロフスクをはじめとして、バイカル地方のチタ、イルクーツクの防禦工事は、その後控へるソフガワニ、コムソモリスク等々多數の工業地帯と密接に結びついて居るし、これ等の地方を結ぶ航空路は完成し、シベリヤ鐵道(復線)が破壊された場合を豫想して、その後方に歐露から沿海洲に達するバム鐵道の建設を急いで居るなど、實に日本の攻撃に對する用意の完璧は呆れる程である。水も洩さぬ防禦陣地と強大な軍隊が、外蒙の防禦工作と相俟つて日滿を威嚇し、すきあらば國境に侵入せんと狙つてゐる極東軍備こそ猛威をふるふソ聯の正體でなければならぬ。

果せるかな今回の事件によつて、かねて我等に馴染深い特別極東赤軍の名は、極東赤旗戦線と改められた。極東赤軍が完全に戦時體制を布かれたことを物語る。戦機熟すか、我等に用意ありや。



尙ほ我等は、現に支那と戦つてゐるのであるが、その實我々は支那兵と戦つてゐるのではない。支那軍服を着けたソ聯兵を相手としてゐるのであり、世界の平和を紊す赤の思想と闘つてゐるわけである。支那にある十數萬の純然たる共產軍も、我等の背後にその牙をむき出してゐることを知れば、瞬時も油斷は出來ないわけである。

### ソ聯の強味と弱味

ソ聯建國の目標が、世界赤化の一段階である限り、飽くまで資本主義國を敵に廻してこれを崩壊させ、この爲にはいつでもこれ等の國々と戦争を辭せない覺悟が、平素から必要である。革命後の國內戦や、資本主義への逆戻りと評された新經濟政策を採つたり、今またスターリンの主張した一國社會主義の建設に邁進するなど、今日のソ聯邦に成長する迄にはジグザグコースを辿つて來た。それがスターリン獨裁の確立であらうとなからうと、一國社會主義建設完成の曉には、いやそれを待つ迄もなく、現に赤化の魔手は世界の至るところに延び、就中西のスペイン、東の支那に猖獗を極めて居る。

口に平和を唱へながら、文明の光及ばぬ處へは、益々猛威を振ふのが一貫したコミンテルンの戦

術である。犬猿たゞならぬ間柄にあつた民主主義國に人民戦線を植えつけて日獨伊に挑戦を差向け、るやうにしたのもコミンテルンの新戦術であつた。一貫した流れは依然世界赤化に變りはない。國防力の充實は、轉じて積極的赤化攻勢の姿勢であり、建國の國是に邁進しつゝある證據である。

だから平素からこれに向つて、國民の注意を喚起し、戦争勃發に關しても、國民の決意を慌てゝ強化する必要もなく、いはゞ平時も、戦争準備であるし、國民精神總動員の態勢をそなへて居る。これは列國と違ふ點であるし、戦争遂行上極めて有利な状態であるといふことが出来る。

ソ聯獨特の組織と、宣傳の力をもつて鋭意國民の愛國心を涵養し、強化するにつとめたことはまことにスターリン獨裁の強味でなければならぬ。またあらゆる産業が、殆ど國營であることも、戦時には直ちに物質的資源を迅速に活用出来るので、これまた頗る有利である。

けれども翻つて、それまで散々けなしつけた國際聯盟に、ソ聯が先年加入したり、防共諸國に對立する民主主義國、英・米・佛に媚を送つて接近を圖つたことは、何を意味するか？ ソ聯が口に唱へる『平和の擁護』から出發したことはない。またフランスをはじめ、小協和國と握手して相互援助條約や、不侵略條約を結んだことは必ずしも『共同の利害』を目標としたことでもない。これこそ、隣接諸國と、先づ親交を結んで置いて、然る後、未だ整はざる自國の軍備擴張に専念する



前提であつたのである。

話はまた戻つて、革命當時から功績少なからぬ赤軍首腦者トハチエフスキー元帥をはじめとして、多数の將軍や指揮官がスターリンのテロによつて葬られてゐる。武勳赫々として、その胸に勳章をかざやかしたソ聯軍人の上にも嵐が吹きまくつて、軍規肅正の嵐はいつおさまるとも知れない。肅軍の祖上に上つた指揮者の數計り知れず、この爲軍の統帥力は著しく低下し、國內不安に意氣消沈した赤軍の實力も窺ひ知れる。年若くして列國の驚嘆を放たしめたトハチエフスキーの如き戰略家、果して直ぐにも生れ出るであらうか？ スターリンと、あれ程親密の間柄であつた國防人民委員元帥オロシロフも、今はスターリンに敬遠され陸海兩軍の統帥權を一緒に握つて居つた彼の實力も、海軍の方はとりあげられ、スターリンの腹心メフリス（國防人民委員次長）が實權を握つて、一個の傀儡に過ぎなくなつた。赤軍もとより頼むに足らず、ゲ・ベ・ウまた然り、既にオロシロフ元帥にしてかくの通り、スターリンの忌諱に觸れ、赤軍の誇る他の現代三人の元帥、エゴロフ、ブジョンヌイ、ブリユツヘルの身邊も屢々危険に曝されてゐる。

肅軍の手はいつまでつゞくか？ リュシコフ大將の脱走に驚愕したスターリンは、極東赤軍にも徹底的手入を行つて、また／＼その指揮官は多數逮捕、行衛不明を傳へられ、部下將兵も戦々兢兢、

( 20 )

兵力多数をたのむ赤軍の實力も甚だしく削減されたのである。こゝにソ聯の弱味がある。

### ソ聯侮るべからず

ソ聯が極東だけに四十萬の兵力を集結した、重爆二〇〇、飛行機、戦車三〇〇〇ときいただけで、恐ろしく老大な軍備である。數の點ではどうやら我が方が劣るやうだ。近代戦の特徴、即戦速決から、この大軍を動員して來られては、世界にその強さを誇る我が皇軍と雖も、その苦戦は免れないであらう。

然し我が皇軍には傳統的な戦闘精神がある。兵力の多寡、兵器の多少によつてのみ、その勝敗を律することは斷じて出來ぬ。日本軍の精銳な人的要素は、よく我に倍する露軍や支那軍を破つて來た。歐洲大戦の経験によつて改装を加へた軍備をもつ列國は、例へば日本の空軍などに就ても、日支事變前までは、二三流だ位にしか考へてゐなかつたものであるが、今度の日支戦で、世界の耳目を驚かすやうな我が空軍の戦闘力を見て、今更日本空軍の偉力を見直したといふ位であるから、我が皇軍の強さは決してソ軍に劣るものではない。然しソ軍も、支那軍の比でないことも、よく認識してかゝらねばならぬ。

( 21 )



然し數と武装の點で先づ我を驚かし、平素から戦争の目標をはつきり認識して、いざとなればそれと總動員を行へるやうに訓練してあるソ聯が、日本をたゞきつけやうと思へば、いつでも向つて來られるのに、それを敢てしないところを観ると、日本を必ず敗る自信が、またしつかりきまらなと言へるであらう。謂はゞ今日は日ソ勢力伯仲といふところなのであらうか。たゞ日本弱しと見れば、直ちに攻撃する準備はいつでも彼に出來て居る。

その時期はいつか？ 日本と支那と戦つて軍隊も國內も消耗しきつたときを待つて居るのが彼である。ソ聯の手先に躍つた蔣介石は、どうやら彼の思ふ壺に嵌つた。日本も彼の陰謀につられて支那と戦つて、と思つてゐるかも知れぬ。だが日本はソ聯の豫期したやうな敗戦どころか、蔣介石が完全に参つてしまつたのに、思つたよりしつかりして居る。こいつはどうしても蔣介石に長期抵抗を叫ばせて、ひつばりまはし、日本がいゝ加減疲れた頃には、自分から参るだらうから、この時こそだと考へて居るのである。相變らずのソ聯の深慮遠謀である。

極東多數の軍需工場の能率は肅正の波に押されて、これまた不振だといはれる。たしかにさうかも知れない。けれどもスターリンの悩みは人心の注意を國外に外らせ、戦争によつて内紛、怨嗟の聲から身をかかさうとまでに至つて居るのだし、今やその盲目的突進の行手は、戦争惹起にまで至

( 22 )

るのではないかと誰か保證しない者があらうか？ これによつて人心の動搖は一先づ統一出來るかである。

この時の戦争の相手國は？ 言はずと知れた日本である。そしてスターリンに對する國民の幻滅や不満が、ソ聯獨特の組織と宣傳の力によつて統一され、一度我等に向つて來たとなると、内紛や不満はやはり一國內の問題に過ぎず、一國の勝敗を賭けた戦争に全力を注ぐであらうことはロシア人といへども變りはないであらう。それ故にこそ、日頃から國民の愛國的精神發揚を煽つて居るとは、國內、國外問題に對する一石二鳥の効果を狙つたものであらう。

この場合のソ聯、決して侮るべからずであることを加へねばならない。

( 23 )

### 長期戦は愈々これからだ

ソ聯建國の國是は、世界の赤化、共產主義の確立であり、それが世界の平和と、秩序を亂し、文化を破壊することは、我々が既に見て居るところである。蔣介石が、赤の煽動に乗せられて抗日戦を敢行したが、今や全く行詰り、絶對絶命に陥つて、蔣自ら墓穴を堀つたところで、抗日の悪夢から醒めてももう遅い。思ふ壺に入つたと、不氣味な笑を浮べて居るソ聯は、愈々これから共産黨の



勢力擴大に力を入れるのだ。我々をかこむソ聯の強大な軍隊と、共產主義の兩刀は、ひし／＼と迫りつゝある。これがどうして黙認出来やうか。

世界の平和、就中先づ第一に東亞の安定を目指す我國が、これを驅逐すべき尊い使命をもつて邁進する日支戦に、絶對的勝利を得て既に一年、日本はこの間、國力が消耗するどころか、戦線の將士も、銃後の國民も、益々意氣旺盛、莫大な戦費も自國で調達して餘裕綽々たるころは、正にソ聯の思惑外れたりといふべきか。

ソ聯の手の裏を見てとつたかどうか、蔣介石はそのいづれに於ても、事こゝに至つては飽くまで抗日を絶叫せざるを得ないのが今日の状態である。日本はどこまでも初めの目的通り、蔣政権の崩壊まで、手をゆるめはしないであらう。

漢口の攻略、蔣政権の没落などは、豫定の経過にすぎない。我等はこれ等のことに、有頂天になつて、勝つて兜の緒を緊めることを忘れてはならない。東洋平和を案ずる者は、何者であつても、これを排除し、撃滅し、東亞の盟主としての我が皇國の立場を、儼として存せねばならぬ。正義日本に双向ふいづれの國と雖も、これを撃滅するの覺悟がなければならぬ。

全く戦は愈々これからだ。ほんとうの長期戦はこれからなのである。果して、その覺悟はよいで

あらうか？ 眼をソ滿國境に注いで、ソ聯のたぎりたつ動きを注視し、我等はもう一度、緊禪一番、日本國民として、銃後の務めに、一段の勵みをせねばならぬ筈である。

### 日ソ戦は、如何なる？

前述のやうに、日ソの開戦は、たゞ時期の問題だと観ねばならぬ。ソ聯が、今日の如き不法な態度を改めない限り、日ソ開戦が事實となつて現れることを、我等は甚だ遺憾とするところであるが、いざ開戦とならば、徹底的にやつけねばならぬ。

戦闘のことは、一に我が皇軍將士におまかせして、何等不安ないけれども、心配なのは、銃後國民の決意と努力とである。

日本人は、兎角熱し易く冷め易い一つの國民性を備へてゐるのではないだらうか。這次の支那事變に於ても、初めのうちは、國民擧げて出征兵の歡送に、慰問袋の發送にと、恰もお祭り騒ぎの如き感を以てやつたやうであるが、今日に至つても、尙ほその頃の如き熱意と、感激があるであらうか。打ち續く戦勝に、幾分だけ氣味ではないだらうか。その證據には、現地より慰問袋、慰問文の發送を催促されてゐるではないか。我等は、最後の勝利を得るまで、最後の五分間まで、將兵の勞



苦を思ひ、皇國の使命達成を思つて、緊張を弛めてはならぬ。

いま日ソ開戦と聞けば、誰しも『こんどは……』と、眞剣に我等の前途を考へざるを得ないであらう。こんどの相手は、支那兵の如きヒヨロ／＼兵とは違ふし、その武器に於ても、近代科學の粹を集めた新式武器が用意されてゐるのである。加ふるに彼等の戦闘精神は『こんどこそ、日露戦の復讐!!』だとも思つてゐるし、コンミニズミに培はれた世界赤化の一大戦とも考へての戦闘であるから、力の入れ方が支那兵とは全然違ふ。

従つて、我が皇軍の作戦も、決意も、異常のものがあつてあらうけれども、國民も亦一人残らず、戦闘参加の決意を以て、生活態度に、就業態度に、奉公に、一段と緊張しなければならぬ。よつて『日ソ開戦せば……どうなる?』の見透しをつけて、今よりその態度を以て進み行くべきである。

『日ソ開戦せば……』支那と戦つて後の日ソ戦であり、ピクとももしない現時の我が國財政状態であるとしても、新鋭新手のソ聯を相手とし、これがまた長期戦を覺悟しなければならぬとしたら、我が國の戦時體制は愈々に強化せられ、全ての仕事も、我等の生活も、亦一大變革に直面しなければならぬ筈だ。

總ての事業は、もつと統制せられるであらうし、その他萬般のこと悉く、細密に、統制強化され

ると思はねばならぬ。個人が、自由に振舞ふことは絶対に禁ぜられるであらう。總てが、國家の大目的遂行の爲めに邁進すべきで、個人の利害關係、犠牲等は、この際また止むを得ぬとしなければならぬ。否、各國民が、喜び進んで、自己を犠牲にして、國家の大目的達成に協力するやうにならなければならぬのである。

戦争の爲めに儲けた、戦争成金が出來た、といふことは、これは過去の出來事で、これからは、戦争によつて大儲けしようなどと考へることは、許されざることであり、出來ないことであると知らねばならぬ。それ／＼の商賣も、時局の影響を受けて、益々やりすらくなることも免れない。物資も缺乏するであらうし、生活も、今迄通りではあり得ない。總てが、強力な統制、指導下に、眞剣に働き、力強く生きるやうにならねばならぬ。

一年や二年で、戦争が簡単に終ると思つてはならない。ソビエットばかりが敵ではない。國際情勢の不安な、暗雲に取り巻かれてゐる日本は、更に第二、第三の敵もあるものと覺悟してゐねばならぬ。日ソ戦を轉換期として、世界は正に二大分派に別れて、相戦ふのではないか、とさへ危ぶまれる現在の國際情勢であつてみれば、茲に世界大戦争にまで發展しかねまじき危機があるのだ。日本はその一方の大將であるわけだ。従つて我が國は、その最悪の場合に立ち至つても、ピクともせ



す、我が國力の偉大さを發揮するやうに、今から引き緊めてかゝらねばならぬのである。

もつと生活は苦しく、苦難は相次いで襲ひ來るかも知れぬ。然しこれに閉口垂れてはならぬ。あの大戦時下に在つた獨逸國民を見られるがよい。食ふに食なく、着るに衣なく、住むに家なく、剩へ父を、良人を、妻子を失ふの、人間最大の不幸に逢ひながらも、よく耐え、よく忍び、ドン底より起ち上つて、遂に今日の隆々たる新興ナチズドイツを打ち樹てたではないか。この獨逸人の意氣、辛抱、努力に負けてはならぬ。この獨逸人の氣魄があつたればこそ、起ち上り得たのだ。よし我等に、獨逸人以上の苦難が襲ひ來るとも、我れに大和魂あり。獨逸魂以上に頑張り得られる筈だ。大和魂は、戰場にのみ通用されべきものではない。銃後國民にも必要だ、銃後のあらゆる些事にも、この魂を持つて事に當るならば、獨逸人以上の頑張り、獨逸人以上の仕事が出来る筈である。我等は、世界一の強國民として、力強く行動しようではないか。日の丸辨當も、一汁一菜も、奉仕も、勤勞も、貯蓄も、あらゆる統制にも、それがお國のためとあらば、喜んでするものである。

戦ひには斷じて敗けてはならぬ。未だ嘗て、敗戦國民の悲惨さを知らず、戰場となつた國土の、銃弾砲火に破壊された慘憺さを知らないが故に、我が國民は、現在戦争をしてをりながらも、兎角戦争を思はず、惡戰苦闘する我が將士の勞苦を忘れがちであるが、この點は、我が國民の一大欠點

であると言はざるを得ない。地形に恵まれてゐるが故に、我が皇軍の餘りに強きが故に、國民に眞劍さが無いのだ。日ソ開戦とならば、そんな氣持であつてはならない。いつソ聯の重爆撃機が、大編隊を組んで、帝都の空を襲ひ來るかも知れない。

獨逸以上の食糧難、物資缺乏が來ないとも限らぬ。否、それが來てからでは既に遅いのだ。さうさせまいとして、政府は、將來の大計の爲めに、現在の國民の不便、不自由を知りながらも、敢て種々の統制強化を圖り、細密の規律を設けて、實行を強ひつゝあるのだ。このことをよく認識せねばならぬ。識つて而して快く最後まで實行することである。

近代戦は、武力戦であると共に、物資戦である。武力戦には世界無比とも言ふべき我が日本は、物資戦に於ても、亦世界無比でなければならぬ。その物資戦は、銃後國民がその部署を受け持たねばならぬのだ。従つて各國民は、一人残らず、日ソ戦に参加の意氣を持つて、各自の任務に當らねばならない。そして初めて、世界最強の國民として、世界に君臨することが出来るのだ。

### 怖るべきソ聯の陰謀

現地に在つては、彼我五十米にまで近接して對峙し、正に一觸即發の危機に在つた日ソ兩軍も、



我が方の隱忍自重の態度により、辛うじて大衝突を免れてゐたのであり、我が重光駐ソ大使と、リトヴィノフ外務人民委員との二回に亘る折衝も、彼我相容れず、愈々決裂かを思はせたのであるが、第三次會談に於て、遂に停戦協定成り、兩國間の險惡なる風雲も、一時解消されることゝなつた。その内容は次の通りである。

一、ソ側沿州時間十一日正午双方戦闘行爲を停止すること

一、日ソ兩軍はソ側沿海州時間十一日午前零時現在の線を維持すること

これによつてソ聯軍は、後退し、危機は一時解消したとは言へ、今後の日ソ關係は、決して樂觀を許さざることを覺悟してゐねばならぬ。

さるにても、怖るべきはソ聯の陰謀である。このことは既に述べた通りであるが、こんどの張鼓峰事件は、全く計畫的の不法越境であり、これによつてスターリンは、打ち續く壓政に、或は血の肅正に、國民怨嗟の眼を國外事件に向け、更に世界列國に對する一大示威でもあつたのだ。國內へのゼスチアーは、既述の如し。一方ソ聯は、世界戦争の勃發を歓迎してゐるのであるから、今回の事件も、その一つの現れであると觀なければならぬ。即ちソ聯は、過日の英帝フランス訪問によつて生れた歐洲政局の小康を喜ばず、日ソ間に事を起し、引いては日獨協定及び佛ソ同盟によつて、

歐洲にまで戦亂を移さうと企圖したものとしか思へない。然し列國よりは開戦の責はソ聯に在りと言はれ、頼みにしてゐたフランスも、佛ソ互助條約が、極東に於ける日ソ紛争には決して適用せられざることを言明し、フランス諸新聞も、極左黨二三新聞を除くほか、いづれも日ソ間の和解を要望し、二三有力紙は、何故リトヴィノフ外相が、日本の戦闘行爲防止提議を即諾しないかを責めた程であつたので、ソ聯も、その企圖することの成らざるを知るや、その陰謀も、放棄せざるを得なくなつた次第なのである。

更にもう一つは、もつと弱いと思つてゐた日本軍の強さが、聞きしに勝るものがあり、戦況は既に我れに不利であり、且つ赤軍の内部には、戦亂を利用してスターリン政權顛覆を企圖してゐる者もあり、極東赤軍にも、その危惧なしとせず、且つソ聯兵の日本軍に投降する者相次ぐの情勢に鑑み、さすがのスターリンも、一とまづその陰謀の魔手を收めざるを得なかつたと言ふべきである。

這度のソ聯の陰謀は中途挫折したとは言へ、モスコは、今やその假面を脱し、ボルシエヴィズムの世界革命、世界破壊に、公然とその正體を現し始めたのである。殊に、スターリンと、犬猿もたゞならずと言はれる、嘗ては支那統一援助の美名の下に、公然支那の赤化を策したガロン將軍、即ちブリュツヘルが、極東軍の總指揮官として、虎視眈々その機を狙ふに於ておやである。



昭和十三年八月十二日印刷納本  
昭和十三年八月十五日發行

定價金十錢  
送料三錢

日ソ停戰協定と  
ソ聯の陰謀

不許複製

著者

高木伍郎

發行兼印刷者

東京市四谷區傳馬町三ノ五  
太田敏夫

印刷所

東京市四谷區傳馬町三ノ五  
柏友社

發行所

東京市四谷區傳馬町三丁目五番地

春光社

電話四谷(四)六八二八番  
振替東京六二六六六番



